

新潮文庫

風立ちぬ・美しい村

堀 辰 雄 著



新 潮 社



風立ちぬ・美しい村

定 價 70 圓

新 潮 文 庫

昭和二十六年一月二十五日 發行
昭和二十六年三月三十一日 二刷

著 者 堀 辰 雄

發行者 東京都新宿區矢來町七一
佐 藤 義 夫

發行所 株式會社 新 潮 社
東京都新宿區矢來町七一

電話九段(33) 二一三番 二二四番

振替東京八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

東京都品川區大井寺下町・東日本印刷株式會社印刷

新 潮 文 庫

風立ちぬ・美しい村

堀 辰 雄 著



新 潮 社 版

140

目次

美 しい村 七

序曲 九

美しい村 一五

夏 四九

暗い道 六九

風立ちぬ 七七

序曲 七九

春 八五

解 説 丸 岡 明

更 級 日 記	姨 捨	死 の か げ の 谷	冬	風 立 ち ぬ
.....				
一九五	一七五	一五六	一三五	九 九

風立ちぬ・美しい村

美
し
い
村

天の灑氣からきの薄明うすあかりに優しく會釋をしようとして、

命の脈が又新しく活潑に打つてゐる。

こら。下界。お前はゆうべも職を曠むなしうしなかつた。

そしてけさ疲つかれが直つて、己の足の下で息をしてゐる。

もう快樂を以て己を取り卷きはじめる。

斷えず最高の存在へと志して、

力強い決心を働かせてゐるなあ。

序　　曲

六月十日　K：村にて

御無沙汰をいたしました。今月の初めから僕は當地に滞在して居ります。前からよく僕は、こんな初夏に、一度、この高原の村に来て見たいものだと言つてゐましたが、やつと今度、その宿望がかなつた譯です。まだ誰も來てゐないので、淋しいことはそりあ淋しいけれど、毎日、氣持のよい朝夕を送つてゐます。

しかし淋しいとは言つても、三年前でしたか、僕が病氣をして十月ごろまでずっと一人で滞在してゐたことがありますね、あの時のやうな山の中の秋ぐちの淋しさとはまるで違ふやうに思へます。あのときは藤のステッキにすぎるやうにして、宿屋の裏の山徑などへ散歩に行くと、一日毎に、そこいらを埋めてゐる落葉の量が増える一方で、それらの落葉の間からはときどき無氣味な色をした茸きのこがちらりと覗いてゐたり、或はその上を赤腹あかへ（あのなんだか人を莫迦にしたやうな小鳥です）なんぞがいかに横着さうに飛びまはつてゐるきりで、ほとんど人氣は無いのですが、それでゐて何だかそこら中に、人人の立去つた跡にいつまでも漂つてゐる一種のほひのやうなもの、——ことにその年の夏が一きは花やかで美しかつただけ、それだけその季節の過ぎてからの何とも言へぬ侘びしさのやうなものが、いはば凋落の感じのやうなものが、僕自身が病後だつたせゐか、一層ひしひしと感ぜられてならなかつたのですが、（——もつとも西洋人はまだ

かなり残つてゐたやうです。ごく稀にそんな山徑で行き逢ひますと、なんだか病み上がりの僕の方を胡散くささうに見て通り過ぎましたが、それは僕に人なつかしい思ひをさせるよりも、かへつてへんな侘びしさをつのらせました…… — そんな侘びしさがこの六月の高原にはまるで無いことが何よりも僕は好きです。どんな人氣のない山徑を歩いてゐても、一草一木ことごとく生き生きとして、もうすっかり夏の用意ができ、その季節の來るのを待つてゐるばかりだと言つた感じがみなぎつてゐます。山鶯だの、閑古鳥だのの元氣よく囀ることといつたら！ すこし僕は考へごとがあるんだから黙つてゐてくれないかなあ、と癪癪を起したくなる位です。

西洋人はもうぽつぽつと來てゐるやうですが、まだ別荘などは大概閉されてゐます。その閉されてゐるのをいいことにして、それにすこし山の上の方だと誰ひとりそこいらを通りすぎるものもないので、僕は氣に入つた恰好の別荘があるのを見つけると、構はずその庭園の中へはひつて行つて、そのヴェランダに腰を下ろし、煙草などをふかしながら、ぼんやり二三時間考へごとをしたりします。たとへば、木の皮葺きのバンガロオ、雑草の生ひ茂つた庭、藤棚（その花がいま丁度見事に咲いてゐます）のあるヴェランダ、そこから一帯に見下ろせる縦や落葉松の林、その林の向うに見えるアルプスの山山、さういつたものを背景にして、一篇の小説を構想したりなんかしてゐるんです。なかなか好い氣持です。ただ、すこしぼんやりしてゐると、まだ生れたての小さな蚋（ハエ）が僕の足を襲つたり、毛蟲が僕の帽子に落ちて來たりするので閉口です。しかし、さういふものも僕には自然の僕に對する敵意のやうなものとしては考へられません。むしろ自然が

僕に對してうるさいほどの好意を持つてゐるやうな氣さへします。僕の足もとになど、よく小さな葉つばが海苔卷のやうに卷かれたまま落ちてゐますが、そのなかには芋蟲の幼蟲が包まれてゐるんだと思ふと、ちよつとぞつとします。けれども、こんな海苔卷のやうなものが夏になると、あの透明な翅をした蛾になるのかと想像すると、なんだか可愛らしい氣もしないことはありません。

どこへ行つても野薔薇がまだ小さな硬い白い蕾をつけてゐます。その咲くのが待ち遠しくなりません。これがこれから咲き亂れて、いいにほひをさせて、それからそれが散るところ、やつと避暑客たちが入り込んでくることでせう。かういふ夏場だけ人の集まつてくる高原の、その季節に先立つて花をさかせ、そしてその美しい花を誰にも見られずに散つて行つてしまふさまざまな花（たとへばこれから咲かうとする野薔薇もさうだし、どこへ行つても今を盛りに咲いてゐる躑躅もさうですが）——さういふ人馴れない、いかにも野生の花らしい花を、これから僕ひとりきりで思ふ存分に愛玩しようといふ氣持は（何故なら村の人人はいま夏場の用意に忙しくて、そんな花などを見てはゐられませんから）何ともいへずに爽やかで幸福です。どうぞ、都會にゐたまれないでこんな田舎暮らしをするやうなことになつてゐる僕を不幸だとばかりお考へなさいで下さい。

あなた方は何時頃こちらへいらつしやいますか？　僕はほとんど毎日のやうにあなたの別荘の前を通ります。通りすがりにちよつとお庭へはひつてあちらこちらを歩きまはることもあります。

昔はあんなに草深かつたのに、すっかり見ちがへる位、綺麗な芝生になつてしまひましたね。それに白い柵などをおつくりになつたりして。……何んだかあなたの別荘のお庭へはひつても、まるで他の別荘の庭へはひつてゐるやうな氣がします。人に見つけられはしないかと、心臓がどきどきして來てなりません。どうしてこんな風にお變へになつてしまつたのか、本當におうらめしく思ひます。ただ、あなたと其處でよくお話したことがあるヴェランダだけは、そつくり昔のままですけれど……

ああ、また、僕はなんだか悲しさうな様子をしてしまつた。しかし、僕は本當はそんなに悲しくはないんですよ。だつて僕は、あなた方さへ知らないやうな生の愉悅を、こんな山の中で人知れず味つてゐるんですもの。でも一體、何時ごろあなた方はこちらへいらつしやるのかしら？　あなた方とはじめて知り合ひになつたこの土地で、あなた方ともう見知らない人同志のやうに顔を合せたりするのは、大へんつらいから、僕はあなた方のいらつしやる前に、この村を出發しようかと思ひます。どうぞその日の來るまで僕にも此處にゐることを、そしてときどき誰も見えないとき、あなたの別荘のお庭をぶらつくことをお許し下さい。

またしても、何と悲しさうな様子をするんだ！　もう、止めます。しかし、もうすこし書かせて下さい。でも、何を書いたものかしら？　僕のいま起居してゐるのはこの宿屋の奥の離れです。御存知でせう？　あそこを一人で占領してゐます。縁側から見上げると、丁度、母屋の藤棚が眞向うに見えます。さつきもいつたやうに、その花がいま咲き切つてゐるんです。が、もう盛

りもすぎたと見え、今日あたりは、風もないのにぽたぽたと散りこぼれてゐます。その花に群がる蜜蜂といったら大したものです。ぶんぶんぶんぶん唸つてゐます。——この手紙を書きながら、ちよつと筆を休めて、何を書かうかなと思つて、その藤の花を見上げながらぼんやりしてゐると、なんだか自分の頭の中の混亂と、その蜜蜂のうなりとが、ごつちやになつて、そのぶんぶんいつてゐるのが自分の頭の中ではないかしら、とそんな氣がしてくる位です。僕の机の上には、マダム・ド・ラファイエットの「クレヴエ公爵夫人」が讀みかけのまんま頁をひらいてゐます。はじめてこのフランスの古い小説をしみじみ讀んでゐますが、そのお蔭でだいぶ僕も今日このごろの自分の妙に切迫した氣持から救はれてゐるやうな氣がしてゐます。この小説についてはあなたに一番その讀後感をお書きしたいし、また黙つてもゐたい。二三年前、あなたに無理矢理にお讀ませした、ラヂイゲの「舞踏會」は、この小説をお手本にしたと言はれてゐる位ですから、まあ、あれに大へん似てゐます。しかし「舞踏會」のときは、まだあんなにこだはらずに、その本をお貸しが出来たけれど、そしてそれをお讀みになつてもあなたは何もおつしやらなかつたし、僕もそれについては何もお訊きしなかつたが、それでも或る氣持はお互ひに通じ合つてゐたやうでしたけれど、いま僕は、あの時のやうにこだはらずに、この小説の讀後感をあなたにお書きできるかしら？

第一、この手紙にしたつて、筆をとりながら、果してあなたに出せるものやら、出せさうなものものやら、心の中では躊躇つてゐるのです。恐らく出さずにしまふかも知れません。……こん

なことを考へ出したら、もうこの手紙を書き續ける氣がしなくなりました。もう筆を置きます。出すか出さないか分りませんが、ともかくも左様なら。

美　し　い　村

或は　小遁走曲

或る小高い丘の頂きにあるお天狗様のところまで登つて見ようと思つて、私は、去年の落葉ですつかり地肌が見えないほど埋まつてゐるやや急な山徑をガサガサと音させながら上つて行つたが、だんだんその落葉の量が増して行つて、私の靴がその中に氣味悪いくらゐ深く入るやうになり、腐つた葉の濕り氣がその靴のなかまで滲み込んで來さうに思へたので、私はよつぽどそのまゝ引つ返さうかと思つた時分になつて、雜木林の中からその見棄てられた家が不意に私の目の前に立ち現れたのであつた。さうしてその窓がすつかり釘づけになつて居て、その庭なんぞもすつかり荒れ果て、いまにも壊れさうな木戸が半ば開かれたままになつてゐるのを認めると、私は子供らしい好奇心で一ぱいになりながらその庭の中へづかづかと這入つて行つた。

さうして一めに生ひ茂つた雜草を踏み分けて行くうちに、この家のかうした光景は、數年前、最後にこれを見た時とそれが少しも變つて居ないやうな氣がした。が、それが私の奇妙な錯覺であることを、やがて私のうちに蘇つて來たその頃の記憶が明瞭にさせた。今はこんなにも雜草が生ひ茂つて殆んど周圍の雜木林と區別がつかない位にまでなつてしまつて居るこの庭も、その頃は、もつと庭らしく小綺麗になつてゐたことを、漸く私は思ひ出したのである。さうしてつ